

＜学校経営方針の重点＞

- 1 学習指導の充実
- 2 生活指導の充実（小学校）、生活・進路指導の充実（中学校）
- 3 情操教育の充実
- 4 小中、学園との連携

項目	経営目標	本年度の重点	具体的な方策	評価	分析結果	改善策	学校関係者評価記入欄		学校の見解と今後の方向性
							評価	コメント	
1 確かな学力	確かな学力を身に付ける教育活動を推進する	指導方法の工夫、学習の見直しをもたせると、指導形態を工夫・改善などにより基本的・基本的な学力の定着と伸長を図る	習熟度別少人数授業（中一英語）やT T（小一国語、算数、理科、体育、中一数学、社会、理科、保体、美術、家庭、2・3年の一部授業）の充実を図り、各教科で「わかる授業」を行う。	B	A+B 評価 100%であるが、B評価が62%を占めている。目標達成に至っていない。	中学校は、新学習指導要領に準拠した主体的に取り組む態度を高め「分かる授業」を創造する。	B	学力に差がある集団に対し、児童個々のレベルに応じた「わかる授業」を展開している。在籍児童の状況で習熟度が変化するので、その都度工夫や改善をお願いしたい。	習熟度に差が大きい、T Tの打合せを綿密に行う時間を確保し、個々の学習課題に対応できるよう努める。
			全教育活動を通して各教科を越えた学習の基盤となる資質・能力（課題解決力・実践力・人間関係形成力・言語能力）の育成を図る。	B	B評価69%であり、育成は図れているものの目標達成に至っていない。	カリキュラム・マネジメントを進め、取組の評価を的確に行う。	B	学習の基盤づくりを通して人間力を継続して育成していく必要性を感じている。	新学習指導要領の「主体的に学習に取り組む態度」の育成を目指し、基盤づくりを進めたい。
			特別な支援が必要な児童生徒の学校生活支援シートを作成するなど、個に応じたきめ細かな指導を実施する。	B	A+B 評価 81%、であるが、全項目の中でC評価19%は一番高い。	学校寮連絡会議など各種会議を活用し、より組織的に個に応じた指導を行う。	A	特別な支援が必要な児童について寮との連携、情報共有の下に適切、且つ効果的に実践されている。	学校生活支援シートの有効活用について共通理解を図り、寮との連携に生かしていく。
			基礎的・基本的な学力の定着や考える力を育成するための指導力を身に付けるとともに新学習指導要領の示す学びを取り入れる。	B	A+B 評価が92%にだが、B評価が61%と最も高く、追究段階であると言える。	単元指導計画を綿密に作成し、基礎・基本の習得や主体的に学ぶ場面を明確にする。	B	発達や情緒に課題を抱える児童が多いため、特性に応じた基礎学力の定着への期待は大きい。	これまで同様、授業において基礎学力の定着に重点をおきつつ、主体的に学ぶ力を育成する。
2 規範意識と社会性	規範意識と社会性をはぐくむ教育活動を推進する	挨拶・返事・言葉づかい・態度などの基本的な生活習慣の確立を目指す	服装、挨拶、言葉遣い、チャイム着席を徹底するとともに、所作について考える機会を設ける。また不必要な情報交換をさせない指導を徹底する。	A	A 評価 73%、B 評価 27%である。不必要な情報交換は0ではないが、大事には至っていない。	作成中の「ルールとマナーの覚書」を基に教職員が一枚岩で指導し、子ども達にもセルフチェックをさせる。	B	施設の支援において重視される項目であり、指導方針を全体が理解、共有することで効果的な支援を行なうことができる。	「ルールとマナーの覚書」が完成するので、教員の共通実践と子ども達のセルフチェックを計画的に進めていく。
			授業や学校生活のルールを明確にし、学習（授業）規律や規範意識を確立する。	A	A 評価 73%、B 評価 27%であり、高い数値となった。	今後も教職員及び講師も含め、授業規律を第一に考え、ルールの徹底を図る。	A	教員の共通理解について温度差も埋まり、授業態度も安定している。引き続き規範意識の向上に努めて欲しい。	前項目同様、「ルールとマナーの覚書」を共通実践し、より、規範意識を高めていきたい。
		進路学習を通して、望ましい勤労観・職業観の育成を図る	毎日の日記指導や個別指導を通して児童生徒理解を図り、いじめや他児からの威圧行為のない安定した学校生活となるよう支援する。	A	A 評価 88%、C+D 評価が0で、最も高い評価項目の一つとなった。	いじめ1件について早期解決ができた。今後もアンテナを高く、子どもの安定を図る。	B	丁寧な関わりから児童のやる気を引き出し、関係作りに努め、困り感などに寄り添っている。	子どもが発信するSOSに、よりアンテナを高くし、寮の先生との連携を密に早期解決を図る。
			進路学習を通して将来、児童生徒が自立して社会生活を営めるために必要な知識・態度・技術を身に付けさせるキャリア教育を進める。	B	A+B 評価は96%である。B 評価 73%は全項目で一番高い。C 評価も4%あった。	寮の先生方と協力し、退園後、高校や社会に出た際に通用するような自立した力を育てる。	B	小学校「特別活動」と中学校「自立の時間」で醸成される「実践力」は寮と連携することで得られる効果は大きい。	体験活動は、キャリア教育の要でもある。コロナ禍で変更された活動が少しでもカバーできるよう努めていく。

3	豊かな心と体の健康をはぐくむ教育を推進する	豊かな心と体の健康をはぐくむ教育を推進する	いこの日や道徳科の授業を要とし、体験活動を通して生命尊重の教育を推進し、自他の命を大切にすることを育てる。	B	A+B 評価が 100%、であるが、B 評価 62%と高い。命の大切さを育む教育に満点はない。	今後も避難訓練を始め、がん教育など様々な角度から命を大切にする教育を行っていく。	A	自殺防止や薬物乱用防止など児童の取り巻く環境に適した教材をテーマに生命尊厳教育に取り組んでいる。	今後もSOS教育・命の日など、多角的に生命尊重の教育に取り組む。可能な限り、子ども達が深く考える機会としたい。
			ものづくりやおしゃれ村での栽培活動(中1を除く)・自然体験や福祉体験など小学校・中学校各学年の発達段階に応じた体験活動を計画的に実施する。	A	A+B 評価 92%で、C 評価は 8%であった。体験活動が豊かな心を育む貴重な時であることが共有できている。	おしゃれ村・ものづくり・福祉体験は、準備や段取りが大変であるが、今後も指導体制を確保し、工夫しながらより充実を図る。	B	ものづくりは特例校指定の要でもあり、今後も特色を活かした授業として位置付けて欲しい。自然体験から得られる効果については一層の充実を図りたい。	自然体験的な学びは、本校の特色であり、教育効果は大きい。今後も福祉担当の先生にご指導をいただきながら、充実させていきたい。
			新型コロナウイルス感染症予防対応を軸とした運動会やクラブ活動を推進する。また、教育相談(例えば担任との面談)等を通して、心身の健康の増進を図る。	A	A+B 評価 100%、A 評価 73%と全項目中 2 番目に高い。厳しい状況下を乗り越えるための努力と工夫が伺われる。	今後も先行き不透明な要素が多いが、その時の状況下で最善を尽くし、運動会やクラブ活動を運営していく。	A	状況を取り入れながら適切な感染防止対策を講じることで児童の健康と命を守り、必要な学校教育活動を保障してきた。	当面の間、感染症予防に努める教育活動の継続が予想される。今年度、培ったノウハウを生かし、できる限りの教育活動を保障していきたい。
4	小・中および学園職員と連携・協力した教育活動を積極的に推進する	小・中学校および学園職員との児童生徒の情報交換を密にして、連携・協力した指導を行う	児童生徒の問題行動について、日常的に寮と情報交換を行うとともに、学寮会を充実させ、連携・協力した指導の充実を図る。また、今年度より、副校長が出席するようになった支援方針会議の情報共有を職員間で確実に進行。	A	A+B 評価 100%、A 評価 62%と比較的高い。コロナ禍で寮へ行く機会に恵まれず残念であった。方針会議はより有意義になった。	厳しい状況下であったが、朝昼夕など寮の先生方との情報交換に努めた。今後は、各教員が寮の先生と連携する方策を考えていく。	A	学校が一ヶ月会議、支援方針会議に参加したことで、自立支援に厚みが出てきた。今後に向けて、更に良い連携の在り方について検討していきたい。	諸会議への参加が自立支援にプラス効果を発揮しているので、今後も継続したい。コロナ禍であるが、教職員が寮の先生方との連携を図るための方策を具現化する。
			月に一度の「授業公開週間」や日常の授業参観を通して、学園に児童生徒の実態を把握してもらい、意見や感想を改善に生かす。	B	A+B 評価が 92%、C 評価 8%であるが、子ども達の様子が伝わっているかの検証がし難い。	日常的に学園・寮の先生が教室に入り易い雰囲気を作る。コロナ禍であるが、寮へ出向く工夫をする。	B	授業公開が定着して公開週間以外でも参観や情報交換を行なう場面がみられた。引き続き参観しやすい雰囲気作りに努めて欲しい	寮の先生方が授業参観とは関係なく、いつでも気軽に子ども様子を教室に入れる雰囲気を高める。
			児童生徒について情報交換やケース会議等を実施して、寮と学校が共通理解のもとで指導に当たり、互いに着地点を見出しながら課題解決や児童生徒の育成を図る。	A	A+B 評価が 100%、であるが B 評価が 42%ある。学園の先生方とより連携を深める必要がある。	寮の先生方との報連相が円滑にいくよう日頃からコミュニケーションを図る必要がある。	B	情報共有の在り方については、感染症防止対策もあり、様々な制約がある中で、円滑に運べるように工夫して押し進めていきたい。	学園と学校は車の両輪であるとの信念の下、寮の先生方と様々な工夫を凝らしながら、連携を押し進めていきたい。

補足…学校教職員による「自己評価」の仕方 4段階評価 A：目標達成、B：ある程度達成、C：もう少し、D：できなかった

○4段階評価 A：目標達成、B：ある程度達成、C：もう少し、D：できなかったを基準として、校内で教職員一人一人が学校を評価したものを集計した。 上記の個人評価中のA～Dの割合をもとに次のように学校としての評価をまとめた。 A … 全体に対するA+Bの割合が90%以上かつ全体に対するAの割合が50%以上 B … 全体に対するA+Bの割合が70%以上	C … 全体に対するA+Bの割合が70%未満(全体に対するC+Dの割合が30%超) D … 全体に対するA+Bの割合が50%未満かつ全体に対するDの割合が20%以上(全体に対するC+Dの割合が50%超かつ全体に対するDの割合が20%以上) (ただし、全体に対するA+Bの割合が70%以上であっても、全体に対するDの割合が20%以上の時は、一段階評価を下げてCとする)
---	---